

## 研究発表

### 『蜻蛉日記』と『とはずがたり』との考察

“Kagero-nikki” and “Towazu-gatari”

ツベタナ・クリステワ\*

The subject of my paper is the study of two of the most famous lyrical diaries of the Heian period and the Kamakura period; that is, “Kagero-nikki” and “Towazu-gatari”. The first of them covers 21 years of the life of the author, Michitsuna-no haha, and the latter 37 years of the life of the author, Lady Nijo. Therefore, they can be considered as representative works of the genre “nikki-bungaku” - as personal and retrospective literature.

First, I am dealing with the characteristics of these two diaries as personal literature, stressing the psychological stimulus which lead the authors to write their diaries, as seen in the two works themselves.

Then, I proceed with undertaking the problem of time as revealed in these two diaries. On the one hand, there is the frame of natural, objective time, and on the other, the flow of the subjective time of the authors - first as a main character of the work (protagonist), and then as an author (narra-

---

\* Tsvetana Kristeva [現職] ブルガリア・ソフィア大学講師

tor). The two basic elements of the subjective time in the lyrical diaries could be defined as personal time or the time of experience, and recollected time or the time of retrospection. As the work proceeds towards its end, the positions of the author as a narrator and as a protagonist tend to unify, and so do the time of experience and the time of retrospection.

At the end, I outline the main subjects of my future study of time in the lyrical diaries in an attempt to finally formulate the temporal characteristics of “nikki-bungaku” as a genre.

今日は、ここで、平安時代と鎌倉時代との日記文学の名作である『蜻蛉日記』と『とはずがたり』とに関する色々な問題点に触れたいと思います。『蜻蛉日記』と『とはずがたり』とは、すぐれた作品でありますから、それぞれの独特性を持っていますけれども、これらには、同じ日記文学としての共通点も表われて来ると考えております。たとえば、個人文学としての特徴は、その共通点の一つであると思われます。これに関連して、作品に表われている作者の執筆動機と目的、登場人物の一人である作者自身の人物像の描写等の問題をすこしばかり取り扱いたいと思います。そして、以上の問題点が集中されている、作者の方法の主要要素である、作品の文芸時間の問題をもおよばずながら考えてみたいと思います。

また、私は、本日の『蜻蛉日記』と『とはずがたり』との考察に、できるだけ以下の立場から離れないように努力したいと思います。すなわち、「文学作品と作者との間にどんなに密接な関係があっても、文学作品は、ただ作者の生活そのままの描写であると考えてはいけません。……文学作品には、作

者の実際の生活というよりも、作者の夢と希望とが具体化されています。」  
(THEORY OF LITERATURE, WELLES & WARREN) という立場です。

『蜻蛉日記』の創作は、女流日記文学の誕生であります。この伝統に基づいている最後の作品の一つのは、『とはずがたり』だと言えるでしょう。これらの成立との間には、三世紀以上の年月がたっています。『蜻蛉日記』には、道綱母の21年にわたる結婚生活が描写されていて、『とはずがたり』では、作者、後深草院二条は、14歳から50歳までの、宮廷生活と、修行の漂泊とを書き記しています。ですから、この二つの作品には、日記文学の個人文学としての特徴、および、回想記としての特徴等が、はっきりと表われています。

この二つの日記を、個人文学として考えると、色々な理由をあげなければなりません。日本文学の専門家が指摘しているように、仮名の発明、和歌の発展、日常生活における和歌の普及、当時の社会での女性の地位、仏教をはじめとする当時の思想の影響等のような、社会的、思想的、文学的、つまり、外面的な理由があります。あるいは、言い換えれば、以上のような特徴は、日記文学の発生のために、客観的な可能性を作ったと言えるでしょう。しかし、日記文学の本質を深く現わしているのは、心理的、内面的な理由だと思われます。それらは、作者の執筆動機、描写の方法等に直接につながっていて、作品そのものからとられます。

『蜻蛉日記』の世界は、空間的には、比較的かぎられていて、その中心となっているのは、作者自身の人物像です。道綱母の人物像は、夫兼家と対立させながら、描写されていて、兼家との関係が弱くなればなるほど、彼女は自分の不幸と不満とを深く感じるようになります。そして、作者、道綱母は、意識すると、意識しないとにかかわらず、自己の確認をもとめながら、自分の実生活にたりなかったものを、『蜻蛉日記』の執筆を通じて補なおうとしています。

当時の社会制度を背景に、道綱母と兼家との夫婦関係は、例外ではなかつ

たでしょう。これについて、作者自身も、『蜻蛉日記』に次のように述べています。たとえば、「おほかたの世のうちあはぬことなれば、ただ一人心の思はずなるを」、そして、「人憎からぬさまにて、十といひて一つ二つの年はあまりにけり。されど、明け暮れ、世の中の人<sup>とを</sup>のやうならぬを嘆きつつ、つきせず過ぐすなりけり」などとしるしています。ただ、以上のことばには、「人にもあらぬ」作者のくるしみと不満もよく感じられます。兼家への長歌にも彼女は、「嘆く涙の衣手にかからぬ世にも経べき身をなぞや……」と書いています。

このような不満の裏側には、道綱母の、自分の才能、創造力への自信が見られると考えております。歌人として知られている道綱母は、自分もそれがよく分っていて、『かげろふ日記』にはそうした自信があらわれているところが少なくありません。たとえば、小一条の左大臣の50歳の祝いに、彼女はいくつかの和歌を作りましたが、その中の二首だけが選ばれたということについて、作者は、「これらが中に漁火とむらとりとはとまりにけり、と聞くに、ものし。」と書き記しています。一方、兼家から贈られた和歌について彼女は、「見れば、紙なども例のやうにあらず、いたらぬころなしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆるまで悪しければ、いとぞあやしき。」と書いています。

そういう兼家が彼女を無視して、ほかの女と関係を持っていたために、作者の心の中に恨みと、不満とが重なっていました。そして、彼女にもっとも激しい嫉妬心をもえさせたのは、町の小路の女の出現です。これは、一つには、道綱母が自分の出身をはこっていたからでしょう。

女流文学の発生と受領の娘としての作者達の出身については、秋山虔先生の『受領の娘』と題する論文がありますが、私は、ここで、『蜻蛉日記』の作者、道綱母の執筆動機の一つとして、彼女が属している貴族社会の中流層の不安定さをあげたいと思います。

さて、『蜻蛉日記』の成立の時から約三百年のちにもう一人の受領の娘の日記が執筆されましたが、これは、後深草院二条の『とはずがたり』です。鎌

倉時代の後半に書かれた『とはずがたり』の作者、二条の執筆動機を考えるさいには、当時の政治的、社会的、思想的な特徴等をみのがすわけにはいきませんから、それらについて、少しばかりでも述べさせていただきます。つまり、政治的、社会的な舞台に、貴族のかわりに武家が登場していること、母系制の名残りが非常によわくなってきたこと、実生活に失望した貴族達の出家が多くなってきたこと、そして、文学状況の一つの特徴として、自照性への傾向があらわれてきたこと、——等であります。それから、以前の女流文学の伝統も、『とはずがたり』の形成のための理由としてあげなければなりません。

しかし、『とはずがたり』に、日記文学の個人性の特徴がとくにはっきり現われているのは、作者の主体的な執筆動機が強かったからだと思われます。

二条の、後深草院の宮廷での女房としての生活は、道綱母の結婚生活よりも、いっそう不安定であったと言えるでしょう。後深草院、雪の曙、有明の月等の登場人物が描写されていますが、有明の月の死とともに、彼女の最後のたよりも消えてしまいました。4歳の時から御所で育てられた彼女は、結局、御所を退出させられました。

母の顔さえもおぼえていなかった二条は、早く父もうしなしました。少なくとも4人の子供を生んだ彼女の手元には、自分の子供は一人もいませんでした。

自分の実生活の不幸を深く感じていた作者は、『とはずがたり』に、「一日一夜に八億四千とかや悲しみも、ただわれ一人に……」と述べています。そういう不幸と不満とをいっそうするどく彼女に感じさせたのは、自分の系譜に対する誇り、自分の創造力への自信です。

執筆動機の一つとなった二条の系譜に関する問題は、福田秀一先生をはじめとする数名の先生方の論文にもくわしく取り扱われています。

『とはずがたり』の中には、ほかの登場人物が二条の高貴な出生、歌人としての能力を高く評価しているところがすくなくありません。たとえば、後

深草院の話には、「久我家は、諸家には準ずべからず……」のようなことばがよくできます。それから、亀山院は、彼女の和歌を読んで自分の印象を次の如く述べています。「傾城（美女・女子）の能には、歌ほどのことなし。かかるにがしがしかりし中にも、この歌こそ耳に留りしか。梁園（具平親王）八代の古風といひながら、（二条は）いまだわかきほどに、ありがたき心遣ひなり」。

以上、『蜻蛉日記』と『とはずがたり』とに表われている作者の執筆動機に、簡単に触れましたが、それぞれの違いがあるにもかかわらず、共通点も見いだすことができます。実生活に対する不満と不安とを感じながら、かなりの才能をそなえていた作者達は、自分の作品の執筆を通して、積極的に生きている場を作りだしたと言えるでしょう。そして、意識的にとか、無意識的にとか、自己を強調することを志ざしている彼女達は、回想記である自分の日記に、過去をかならずしもそのまま書き記していないと思います。こうあってほしいと望んだ描写も少なくありません。これは、とくに『とはずがたり』に感じられます。

以上の立場を根拠として、作品の成立について、一言申し上げたいと思います。この二つの日記は、段階的にというよりも、前の歌と、主な事件、旅行についての記述筆を材料に、晩年に、まとまった作品として作られたと思います。あるいは、いいかえれば、この日記は、随時記録ではなくて、全部で、“post-factum”、つまり「事後に」書かれた随回想の記録であると考えております。作品の中にわりにはっきりと表われている読者の予想も、この事を指摘していると思います。

以上の問題点と直接につながって、それらを集中的に示しているのは、作品の本質的な要素である文芸時間の特徴です。

日記文学の文芸時間を考察すると、それを大きく二つに分けることができます。すなわち、作品に含まれている自然の時間、客観的な時間のわくと、作者の、登場人物の一人としての、および、作者としての主観的な時間とがあ

ります。

『蜻蛉日記』の客観的な時間は、天暦8年(954)から、天延2年(974)までの21年間です。そして、これは、必ずしも作品の中にくわしく指摘されていませんが、作者自身の人物像の描写のために重要性を持っているかぎり、時期の記録が出てきます。また、この客観的な時間の流れにおいて重要視されているのは、四季の変化ですが、それは作品の主観的な時間とも密接にかかわっています。

さて、『蜻蛉日記』の主観的な時間には、道綱母の登場人物の一人としての経験的な時間と、描写されている事件から離れている作者の回想的な時間とがあります。そして、作品がおわりに近づけば近づくほど、作者としての道綱母と、登場人物としての道綱母とは、一致して、回想的な時間と、経験的な時間とは、一つになっていきます。

『蜻蛉日記』の回想的な時間は、後で起った事件の予期として現われていますし、道綱母の人物像の描写にかかわっていない記述にも見られます。たとえば、安和2年(969)の西の宮の左大臣の流謫<sup>ひだりのおとど</sup>についての記述は、その中の一つであります。回想時間が直接に記されているところも色々あげることができます。たとえば、雨の日に彼女が兼家の来るのを待っている場面、上巻のおわりの記述等があります。

この関係で注目すべきは、『蜻蛉日記』の序文です。「かくありし時過ぎて、世のなかにいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に<sup>ふ</sup>経る人ありけり……」。三人称の使い方も、回想的な時間を強調していると思います。

私達が日記文学をまとめた作品としてとらえることができるのは、一つには、この回想的な時間のためでしょう。

さて、『とはずがたり』にうつりますが、『とはずがたり』の客観的な時間は、文永8年(1271)から、嘉元4年(徳治元年—1306)までの36年間です。時期の記録が少なく、作品の中でそれは決して主要な役割をはたしていません。こういう記録は、『蜻蛉日記』と同じように、作者の人物像の描写にか

かっていますが、『とはずがたり』には、公的な事件の記録も出てきます。たとえば、後嵯峨院の病氣と死との記述等は、この中の一つであります。こういう問題は、作品の文芸空間ともつながっています。

『とはずがたり』には、作者の回想的な時間がとくにはっきりと表われています。一つには以前の女流日記と物語との伝統があったからなのかも知れません。

巻一に14歳で登場している二条の描写にも回想的な時間が記されていますし、後の事件を予想している記述も少なくありません。そして、『蜻蛉日記』の如く、回想的な時間が直接に表現されている場面もあります。たとえば、巻一に書かれている西行へのあこがれについてのことばと、自分も「かかる修行の記を書き記して、なからん後の形見にもせばや……」等がそれです。

さて、『とはずがたり』の文芸時間の問題をとりあつかうに当たっては、鎌倉時代の人々の時そのものに対する考えかたも無視してはいけないと思います。何よりも先ず、仏教の普及を一つの理由としてあげなければなりません。

『とはずがたり』に、とくに後半の紀行には、作者二条が自分の経験を、仏教の無常感と関連させながら、書き記している場面も出てきます。一つの例として、次のことばを引用したいと思います。「生ぜし折も一人来たりき。去りて行かむ折も又然なり。相会ふ者は必ず別れ、生ずる者は死に必ず至る。桃花粧ひいみじと雖も、終には根に返る。紅葉は千入の色を尽して盛りありといへども、風を待ちて秋の色久しからず。名残を慕ふは一旦のなさけあり」。

以上、『蜻蛉日記』と『とはずがたり』とにあらわれている文芸時間について非常に簡単に述べましたが、これに関する問題はまだまだたくさんあります。たとえば、日記の和歌(『蜻蛉日記』の場合一和歌と長歌)の時間の問題が大変興味深く、時間の問題とつながっている空間の問題の研究(とくに、『とはずがたり』の場合)等もおもしろいと思います。さらに、日記文学には、DURATION(継続時間)、すなわち、巻の長さ、と、それぞれに表われて



いる客観的な時間の長さとの間の関係等も、研究の対象になりうると思います。

しかし、自然の時間（今の発表のために私に与えられた時間）は、もう塞まっていますから、これでおわらせていただきます。

### 討議要旨

野村精一氏より、道綱母の歌と『蜻蛉日記』の歌のありかたについていうと、例えば『蜻蛉』の下巻最後の方にある歌は実は道綱母の歌ではないのであり、そういう点の位置づけも考え合せたら散文と歌の関係の問題ももっと明瞭になると考えるとのコメントがあった。

三谷邦明氏より、発表者は日記の執筆動機として実生活の不満と歌人としての自信をその要素に挙げているが、その程度の規定ならば全ての文学形態にあてはまることであり、女流日記という特殊のジャンル論になり得ていないと考えるとの感想があり、発表者より、本発表は日記文学を個人文学として取り扱わねばならないという事などを論じている訳でないから、発表時の規定は確かにジャンル論にはなり得ていないと思う、今の発表は、今後文芸時間の研究を通して発展させていきたいと思うとの回答があった。またこれを受けて三谷邦明氏より、日記文学の時間を考える場合、体験した時間、回想の時間、叙述の時間という三つのものがあり、この三つの時間の関わりあいの中で日記の時間の問題を扱っていくという考え方があるので、発表者の今後の研究の中に、特に叙述の時間の考察を取りいれたらいいと思うとの感想があり、発表者から、回想的時間とは、とりまなおさず叙述の時間であると考えるとの返答があった。